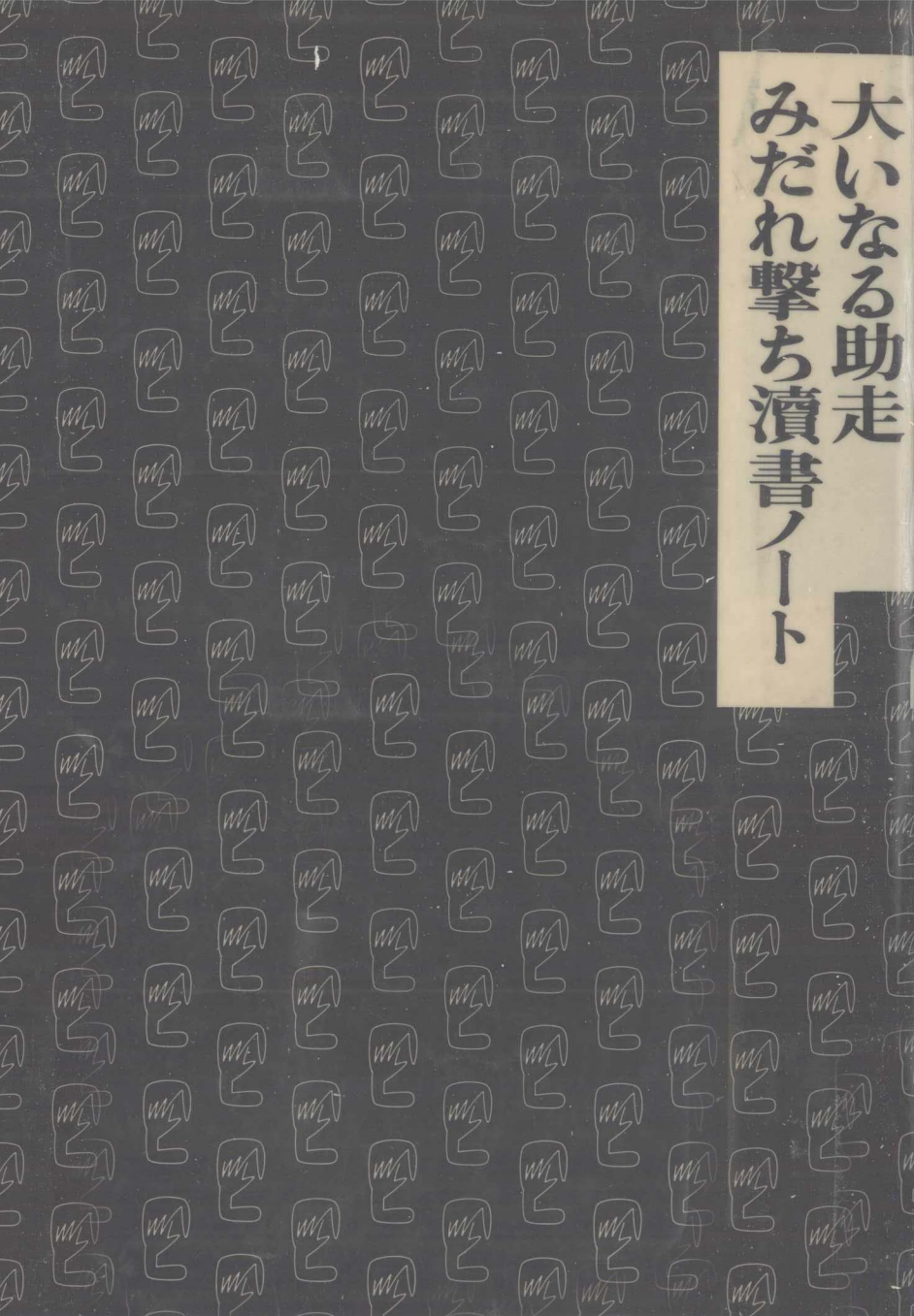


大いなる助走
みだれ撃ち瀆書ノート





筒井康隆全集 21

大いなる助走
みだれ撃ち瀆書ノート

新潮社

おお じよきう う とくしよ
大いなる助走・みだれ撃ち讀書ノート



筒井康隆全集 第21巻

昭和五十九年十二月二十日 印刷
昭和五十九年十二月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(千一六二)
電話 業務部 東京〇三二六六・五一一
編集部 東京〇三二六六・五四一一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-644421-6 C0393

筒井康隆全集第二十一卷・目次

長 篇

大いなる助走……………11

エッセイ みだれ撃ち瀆書ノート

L・チェーヴァ「枢軸万歳」……………	187	R・チャンドラー 「マールロウ最後の事件」……………	194
A・モラヴィア「ロボット」……………	187	佐藤隆介 「池波正太郎の芝居の本」……………	195
F・フォーサイス「シェバード」……………	188	檀一雄「火宅の人」……………	196
田中光二「大いなる逃亡」……………	189	長部日出雄「善意株式会社」……………	197
半村良「亜空間要塞の逆襲」……………	189	佐木隆三 「復讐するは我にあり」上・下……………	198
山下洋輔「風雲ジャズ帖」……………	190	安部公房「笑う月」……………	199
岩波講座「文学1…文学表現 とはどのような行為か」……………	191	富岡多恵子「動物の葬禮」……………	200
星新一「きまぐれ暦」……………	192	研究社「アメリカ俗語辞典」……………	201
A・マクリーン「軍用列車」……………	193	桂米朝 口演「上方芸人誌」……………	201
A・アレー「悪戯の愉しみ」……………	194	ル・クレジオ「巨人たち」……………	202

日高敏隆「チョウはなぜ飛ぶか」	203
井口厚「幻のささやき」	204
手塚治虫	205
「ブラック・ジャック」①⑦	205
イーデス・ハンソン	206
「花の木登り協会」	206
新田次郎「聖職の碑」	207
C・G・ユング「分析心理学」	207
田河水泡「のらくろ自叙伝」	209
ロブ・グリエ	210
「新しい小説のために」	210
鈴木敏夫「実学・著作権」上・下	211
半村良「闇の中の黄金」	212
J・メルル編	213
「年刊SF傑作選7」	213
D・ハメット	215
「ハメット傑作集2」	215
暁峻康隆「元禄の演出者たち」	216

A・ヘイリー	217
「マネーチェンジャーズ」	217
藤枝静男「田紳有楽」	217
かんべむさし「サイコロ特攻隊」	219
E・L・ハルトマン「眠りの科学」	220
渡部昇一「知的生活の方法」	221
P・K・ディック「地図にない町」	222
渡辺一民「フランス文壇史」	223
村上龍「限りなく透明に近いブルー」	225
山崎正和「不機嫌の時代」	227
山田風太郎「幻燈辻馬車」	228
伴野朗「五十年の死角」	228
新田次郎「小説に書けなかつた自伝」	229
W・マッケイ	230
「夢の国のリトル・ニモ」	230

萩原葉子「蕁麻の家」	230
笠原嘉「精神科医のノート」	231
松本清張「ガラスの城」	233
野崎昭弘「詭弁論理学」	234
日高敏隆「エソロジーは どういう学問か」	235
大江健三郎「ピンチランナー 調書」	236
P・ベンチリー「ザ・デューブ」	237
ヤン・コット 「演劇の未来を語る」	238
山野浩一「殺人者の空」	239
中村智子「『風流夢譚』 事件以後」	240
ノエル・カワード 「ノエル・カワード戯曲集」	241
光瀬龍「秘伝宮本武蔵」上・下	242
山田風太郎「剣鬼喇嘛仏」	243

W・アイリッシュ 「さらばニューヨーク」	244
小松左京「虚空の足音」	244
野田昌宏「レモン月夜の宇宙船」	245
高斎正「ホンダがレースに 復帰する時」	246
山村美紗「黒の環状線」	246
藤沢周平「闇の歯車」	247
A・クリステイ 「クリステイ傑作集」	248
C・ウィルソン 「小説のために」	248
田辺聖子「お聖どん・ アドベンチャー」	250
三好京三「子育てごっこ」	250
西村寿行「咆哮は消えた」	251
小林信彦「家の旗」	252
飯沢匡「脱俗の画家 横井弘三の生涯」	253

高橋たか子「高橋和巳の 思い出」	254
角間隆「テレビは魔物か」	255
半村良「魔女街」	255
半村良「幻視街」	256
平田敬「喝采の谷」	257
P・ロス「われらのギャング」	257
臼井吉見「事故のてんまつ」	259
ラブランシュ／ボンタリス 「精神分析用語辞典」	260
色川武大「怪しい来客簿」	260
L・ネイハム「シャドー81」	261
津田信「幻想の英雄」	262
渡部昇一「レトリックの時代」	263
細川隆元「戦後日本をダメ にした学者・文化人」	264

T・トンプスン「血と金」上・下	265
岡本好古「揚州の幻伎」	265
丸谷才一「遊び時間」	266
阿木翁助「演劇の青春」	267
石沢英太郎「五島・福江行」	268
H・ビンター「ハロルド・ ビンター全集 1」	269
松下英麿「去年の人」	270
山田正紀「神々の埋葬」	272
かんべむさし「建売住宅温泉峡」	272
澤田隆治「私説コメディアン史」	273
中村光夫「近代の文学と文学者」	273
山本祥一朗「作家と父」	275
長野祐二「新人作家はなぜ認め られない——作家の不 遇時代考——」	276

渡辺慧「認識とボタン」	277
加瀬英明「日本の良識をダメにした朝日新聞」	278
ロジェ・ケルニエ「シネロマン」	279
高城修三「榎の木祭り」	281
鈴木均「職業としての出版人」	282
安部公房「密会」	283
小林秀雄「本居宣長」	284
J・D・サルンジャー「大工よ、屋根の梁を高く上げよ／シーモア―序章」	285
利沢行夫「サルンジャー」	286
山本周五郎「強豪小説集」	287
山内ジョージ「絵カナ? 字カナ?」	288
J・ルース・エヴァンス「世界の前衛演劇」	289
A・ストー「ユング」	290

光瀬龍「明治残俠探偵帖」	293
I・カルヴィーノ「レ・コスミコミケ」	294
D・ハメット「コンチネンタル・オブ」	296
R・ブローティガン「バビロンを夢見て」	297
栗本薫「ぼくらの時代」	298
中島梓「文学の輪郭」	298
吉行淳之介「夕暮まで」	299
浅倉久志「ユーモア・スケッチ傑作展」	299
T・J・バス「神鯨」	300
川端柳太郎「小説と時間」	301
P・K・ディック「ユービック」	302
川上宗薫「夜の残り」	303
佐藤信夫「レトリック感覚」	303

森卓也「アニメーションの
ギャグ世界」……………304

F・カリンティ「エペペ」……………306

A・カルペンティエール
「時との戦い」……………307

A・バージェス
「ヘミングウェイの世界」……………308

荻野恒一「現存在分析」……………308

G・ヴァルテル「ネロ」……………309

N・ベーン「ブリンクス」……………310

M・シューヴァル／P・ヴァールー
「テロリスト」……………310

加賀乙彦「宣告」上・下……………312

B・コリンズ「審判」……………314

かんべむさし「公共考査機構」……………315

山田正紀「竜の眠る浜辺」……………316

G・フィッツサイモンズ
「早すぎた警告」……………316

S・カミンスキー
「ロビン・フッドに鉛の玉を」……………317

あとがき……………319

シナリオ

部長刑事——もうひとつの動機……………321

〔補遺〕

解 説

道後——日本最古の ヘルス・センター……	357
万国のおっちょこ ちよい諸君！……	361
『花の木登り協会』を推す……	362
『ビックラゲーション選』 推薦文……	362
『ピアノ弾きよじれ旅』 推薦文……	363

椎 名 誠 366

一挙兩得、一石二鳥……	363
『唐獅子株式会社』推薦文……	364
『ブルシャンブルーの 奇妙な黄昏』推薦文……	365
『コインロッカー・ ベイビーズ』推薦文……	365

大いなる助走・みだれ撃ち・瀆書ノート

装
幀

山
藤
章
二

長篇 大いなる助走

ACT 1

ACT 1 / SCENE 1

行進曲「旧友」が聞こえてくる。近所のパチンコ屋からである。パチンコ屋はこの「旧友」はじめ「君ヶ代行進曲」だの「軍艦マーチ」だのを含む同じ行進曲を三十分程度くらのローテーションでもってが鳴り立てる。いい加減いらいらするだろうと思つて保又一雄は同情するのだが、神経が凶太いのか音痴で同じ曲ばかりだということがわからないのかそれとも行進曲が好きなのか、鱧田平造は平気で窓を開け放し、騒音の中で一日中原稿を書き続けている。騒音は行進曲だけではない。時おりパチンコ屋の店員の、何を言っているのかさっぱりわからないアナウンスも入る。

「ええらっしやいませ。ええらっしやいませ。え本日の来店りとございます。え本日うちろめないまいのさいですまいです。なおおでないのまえにおおりよくの、ひますすからも

あります。れすか。れすか。りとぎいます。りとぎいます」

うすつべらな座布団の上の正座に耐えられなくなつて身じろぎし、自分でもそれがちようど身をくねらせているように感じられたので、ついでのことに保又はまた鼻を鳴らした。「ねえ先生。お願いしますよ。先生に書いていただかないと箔がつかません。五十枚。五十枚がご無理でしたら四十枚でも。三十枚でも」

「わはははははは」保又は背を向けたまま机に向かつている鱧田が機嫌よさそうに笑つた。「今からではとても無理だなあ。四日までには『焼畑センター街ニュース』に読切十二枚、『焼畑商工業新聞』の連載が毎回五枚の計十五枚、『焼畑市報』のエッセイ十六枚半、『焼畑税務署だより』にエッセイ三枚書かにゃならんのだよ」

流行作家を気取っているわけであるが、掲載誌紙名や枚数をきちんと憶えているところなど逆にまったく流行作家らしくなく、鱧田自身はそれに気づいていない。巨大草食獣の臀部を想わせる鱧田の尻を嫌悪の眼で見ながら保又はよくまあこの古い木綿のひとえものが尻の真ん中で裂けないものだ、いつものように感心した。肉のだぶついた鱧田の尻はぐしゃりと左右へ拡がり、座布団からはみ出してそのはみ出した部分が垂れ下がっているのである。

「でも、先生の筆力なら、それぐらいは」無理に顔を歪め

て笑顔を作り、保叉はいった。笑顔で喋っているか仏頂面
で喋っているかが、なぜか鱧田にはわかるらしいのだ。

「そうでしょう先生。五十枚や百枚、それぐらいは先生な
ら」襖^{ふすま}をあげ、鱧田の妻が茶を持って入ってきた。入って
きたといつても本でいっぱいの四畳半、客の保叉が座って
しまふともはや彼女が足を踏み込む余裕さえなく、進める
だけ進んで手をのばし、茶を盆ごと保叉に手渡ししかない。

妻のいる前で編集者に「はい、こら」とされると、眼に見えて鱧
田の機嫌がよくなることを保叉は知っている。彼はまた鼻
声を出した。「先生が書いてくだらないと、雑誌にでか
い穴があいてしまふんですよ。なんとかお願いしますよ」

「しかたがないなあ。もっと早く言ってこないからいかに
のだ」ゆっくりと保叉に向きなおり、獅子鼻から鞆^{たづね}のよう
に息を吹き出して鱧田はいった。「じゃあ、三、四十枚の
ものでよけりゃあ」

「いやあ。助かったあ」保叉は大袈裟に喜んで見せ、わざ
とハンカチを出して額を拭った。「これで次の号が出せる」

鱧田の妻は入ってきた時のままの仏頂面で茶の間へ去っ
た。その仏頂面がうだつのあがらぬ地方文士の亭主に向け
られたものか、四十面下げてまだ文学同人誌などを主宰し
ている自分に対しての輕蔑^{けいべつ}の意味を持つのか、保叉にはわ
からなかった。どちらにしろ、これ以上の芝居は馬鹿はか
しいと思い、保叉は足を投げ出してがらりと口調を変えた。

「いい原稿がなくて困っちゃうよ。いいものがなきゃ、無
理して出さなくてもいいってよく言われるけど、やはり同
人雑誌評の選者に忘れられても困るからね」

「なあんだ。今日はもうやめるのか。もう少しいい気分
にしておいてほしかったのに」原稿を引き受けるなり保叉が
芝居を中断したので鱧田はやや不機嫌になり、煙草に火を
つけながら鼻を鳴らした。「するとおれに頼みに来たのは、
雑誌の体裁を整えるためか」

「まあ、早く言えばいつも通りのページ数にするためだ」
率直に、保叉はいった。「ページ数を落すと、原稿を載せ
てやらなかった同人がうるさいのでね」

「しかしお前さんもよくやるよなあ」鱧田は書棚^{ととぞな}を眺めた。

書棚は材質造作大小さまざまのものが両の壁ぎわに並ん
でいて、ところどころ五分板を組み合わせただけの部分も
あり、棚のいちばん上に横に積み重ねられた書籍がほぼ天
井にまで達しているところもあるから、地震がなくてさえ
いつ崩壊するやら予測がつかず、はなはだ物騒である。片
方の書棚の中ほどの段には「焼畑文芸」のバック・ナンバ
ーが全冊揃っている。だいたい一年に四冊出し、約十五年
続けたわけだから、ほぼ六十冊になる。ずらりと並んだ
「焼畑文芸」には三冊に一冊の割で鱧田の書いたものが掲
載されており、その号だけは書棚から取り出しやすいよう
に他の号よりも少し背表紙を突き出して並べてある。他に